

新版 極光のかけに

高杉一郎



富山房百科文庫

1



新版 極光のかげに

高杉一郎



富山房百科文庫

1



新版 極光のかげに
— 富山房百科文庫 1 —

昭和五十二年四月八日 第一刷発行

定価 七〇〇円

著者 高杉一郎

発行者 坂本起一

印刷者 白井倉之助

株式会社 精興社

〒一〇一 千代田区神田神保町一丁目三番地
発行所 富山房

合資会社
電話 (〇三) 二九一―二一七
振替 東京五―五四五二九

© Ichiro Takasugi. Printed in Japan, 1977.

(落丁・乱丁本は おとりかえいたします)

0295 - 095004 - 7313



新版 極光のかけに
— 富山房百科文庫 1 —

昭和五十二年四月八日 第一刷発行

定価 七〇〇円

著者 高杉一郎

発行者 坂本起一

印刷者 白井倉之助

株式会社 精興社

〒101 千代田区神田神保町一丁目三番地
発行所 富山房

電話 (〇三) 二九一—二一七—
振替 東京五—五四五二九

© Ichiro Takasugi. Printed in Japan, 1977.

(落丁・乱丁本は おとりかえいたします)

0295-095004-7313

表紙・扉
瀬川康男

解題

鶴見俊輔

社会主義の理念についての説明は、明治のはじめに同志社で教えた米人ラーネドが日本でおそらくはじめておこなって以来、長い年月にわたってなされてきた。天皇制の弾圧に抗してたたかうことをとおして、社会主義の理念はさらに純粹なものにされ、高い理想となって多くの日本人の中にたもたれた。

だが社会主義国家についての現実的な肖像は、一九四五年に日本が戦争に負けてから、はじめて日本人によってえがかれたと言ってよい。高杉一郎の『極光のかけに』は、その一つで、長谷川四郎、石原吉郎の文章とともに、戦争の捕虜として收容所の中からこの社会主義国家を見た記録である。

どの国家をも、その国家がとじこめた監獄の内部から見る時、その国家が公式に見せる表情とはちがういっふうかわった表情を見せる。そのいっふうかわった表情を手がかりにしてその国家全体を見わたす時に、政府の正式発表した文書をとおして得るのとはちがう、地道な認識をつみあげる道がひらける。

それは、東大新人会風のソヴィエト・ロシアの肖像とは、どれほどかけはなれた肖像であったか。東大新人会の系譜よりもさらに以前からの日本の社会主義運動の指導者たち、片山潜、荒畑寒村、徳田球一のソヴィエト・ロシア像とどれほどちがうものであったか。

高杉のおかれたのはシベリアの捕虜収容所である。彼の記録は、収容所内の日本人の肖像としても興味深いし、それはソヴィエト・ロシア論としてだけでなく、日本論としてのひろがりをもあわせもっている。彼の直面するのは、日本人捕虜を管理するソヴィエトの役人であり、これらの人びとは、日本に滞在するソヴィエト・ロシアの大使とはちがう表情で日本人に対する。シベリアではたらくのは日本人捕虜だけではない。そこには、ロシア各地、そしてポーランドやラトヴィアなどの周辺地域からの流刑囚を含んでいる。その故に、この記録は、日本人捕虜の視点だけでなく、ソヴィエト・ロシアの囚人の視点をあわせもって、そこからソヴィエト・ロシアをとらえる。

注目すべきことは、このように管理者と対し、また囚人仲間とともにくらす中で、高杉のロシア像が、ロシア人を一つの集団として一色にぬりこめなかったことである。その故に、彼のソヴィエト・ロシアという国家に対する見方も、一色ではなく、そのさまざまな部分を、別の色調でえがきわける。

この本は、ソヴィエトの強制収容所の内部から見たソヴィエト・ロシアの肖像でありながら、ソヴィエト・ロシアに対する断罪の書ではない。

高杉の証言のこの特色は、発表当時よく理解されなかったらしい。

「留守家族が疎開していた村にかえった私は、そこである団体にたのまれて、ソヴェート・ロシアの話をした。しかし、すぐに私はそのことを後悔しなければならなかった。

というのは、私はそのとき、ソヴェート・ロシアのさまざまな社会現象について、それぞれ真実を真実として話し、大ざっぱな概括はできるだけ避けたつもりであったが、聴衆は結局、私の話から自分自身がロシ

アについていままでもっていた概括的な先入主を裏書きするような実証をひきだただけらしかった。全く反対な二つの結論が、ともに私の言った言葉として、幾日かののち、私のところにかえってきた。そのどれもが、非常にせまい意味で、政治・党派的なものに形をかえてしまっていて、私をびっくりさせた」

高杉の著書は日本のロシア観の歴史の上にまったく新しい一ページをくわえたものであり、その新しい実質はすぐに理解されるといふことがなかった。最初の発表から三十年近くたった今では、当時よりは少しは理解しやすくなっているように思える。

これは、ソヴェエト・ロシアという社会主義国家における民主主義の現状と可能性について著者の見聞をのべた本である。社会主義国家における民主主義の可能性については、戦前はもとより戦後になってもしばらくは現実的に考えられたことが日本ではなかった。

高杉はいろいろのところで、日本人捕虜として、ロシア人が民族的偏見なく親切に彼に対する経験をもつ。「ソヴェエト権力の不吉な暗い面と、この民衆の底抜けの明るさとはいったいどこでつながっているのであらう」

流木を動かす仕事を一緒にした大男のロシア人ペーチャは、ドイツとのたたかいで捕虜になったことがあるそうで、高杉にこんなことを言う。

「俺たちはまず何よりも人間であればいいわけだ。たとえば、君と俺と今こうやってむかいあって坐っているが、これはつまり、ひとりの人間ともうひとりの人間がむかいあってるんで、ロシアの囚人と日本の俘虜がむきあってるんじゃない。そんな区別は、馬鹿や狂人のつくったたわごとさ。」

俺の考えでは、世界で何人かの男がとんでもない大まちがいをしてかした。そのまちがいのおかげで、俺はヨーロッパへ行って働き、君はシベリアで働くというような馬鹿げたことになった。この何人かの阿呆のほかに、世界じゅう誰ひとりこんな馬鹿げた結果を望みはしなかったんだよ」

高杉によれば、「これは、ロシアでは、最も平凡な働く人々の口から、さまざまなヴァリエーションの形でよく聞かされるスラヴ民族独特の人生哲学である。書物的なものではない、人生のなかから滲み出してきたこのような思想が、民衆の日常生活のなかに溢れている」

ソヴェエト政権下のマルクス・レーニン主義の運用は、この人間みな兄弟というもとのロシア人の思想をおしひろげることにはならなかった。むしろ、日本人捕虜からシャベルをぬすむ共産青年同盟員や、ソヴェエト百科辞典をたてにとって日本に地下鉄があることを否定する女教師や、ロシア語のできる高杉にいがかりをつけてさらに奥地にある流刑地に追いやる政治局員のように、マルクス・レーニン主義が、民族差別の道具として使われる場合があり得ることを例によって示している。この場合にも、高杉は公平に、社会主義国家ソヴェエト・ロシアのために生産をあげようとして民族の差別などをこえて仮借なくみんなをはたらかせる監督キャリアモフをソヴェエトの典型としてえがくことを忘れない。

たまたまあったロシアの大学生と、ユーゴスラヴィアのチトーについて会話をかわすところもおもしろい。

「僕はひとつ質問があるんだがね。ユーゴスラヴィアのチトーはなぜまちがっているのかね？」

「彼はブルジョワ的な民族主義者だよ」

「うん、それは僕も新聞で読んだ。だけど、どこから彼を民族主義者だと言うの？　彼は古いコムニストで勇敢な反ファシストだったじゃないか」

「チトー元帥というが、彼は元帥の称号をいったい誰から、いつももらったのかね？　きっとユーゴスラヴィアの王様からもらったのにちがいない」

こんな会話はソヴィエト・ロシアの大学生のもつ世界知識の性格を、照し出す。

このような世界知識を、ソヴィエト・ロシアの大学生以上の速成教育をとおして収容所内の日本人捕虜はつぎこまれ、ここに日本人収容所内の民主化運動がはじまる。政治局員の指導の下におこなわれるこの民主化運動について、収容所長であるロシア人はきわめて懐疑的で、高杉に言う。

「君たちがここでやる民主運動は全部無意味チェブリーハだよ。わかるかい？　全部無意味だ。だが、君たちが日本の港に上陸して一週間たったら、そのときこそ君たちは民主運動の意義をほんとに理解するだろう」

このあたりを読んでみると、所長とこのようにうちあげた会話をかわしうる日本人捕虜個人の存在が、政治局員にとってけむったく感じられたのもわかるような気がする。

政治局員のひそかな工作によって、この収容所からさらに奥地に移されて重労働を命じられた後に、高杉は、こう考えるようになる。

「だけでもね」

と彼は、捕虜仲間の日本人の一人がシベリアの民主化運動の成果をうたがうのに対してこたえる。

「七十万という日本人がこの土地で社会主義を体験したという事実、こいつは無視するわけにはいかんよ。」

その日本人が、いわゆる民主主義者であろうと、反動であろうと、そんなことは問題じゃない。それらの人たちが、例外なく、社会主義をパンフレットのなかではなく、生活のなかで体験したという事実が問題なんだ。

たとえば、ロシアでは、昼休み時間に労働者が売店にパンを買いに行けば、どんなに長い行列をつくっていても優先的に売ってくれるというようなこと、作業場でけがをしたら、どこでもいい、アンブulatoriya 附近の診療所に行きさえすれば、看護婦が無料で手当をしてくれるということ、宅地附近の私有地から馬鈴薯をかってもらって、もほとんど問題にもされないのに、集団農場で、社会主義的な所有に対しておなじことをやれば、十年にも及ぶ厳刑をもって罰せられるということ。そういったようなことが、今たくさん我々の日常生活のなかにころがっている。それが、つまり僕の言う社会主義だがね。

自分では気がつかないかもしれないが、いま僕たちは多かれ少かれ、社会主義的な物の考え方をしているぜ。たとえば、売店に行く。普通の主婦たちなら、例の『いちばんあとは誰？』トウ・バスレイド をやって、行列のしっぽにつくんだが、僕たちはまっすぐ売場に行って、『僕は今働いてるんだが、休憩があと十分しかないんだよ』とか何とか、ともかく交渉してみるだろう。というのも、たいていの場合、それが受け容れられるからだね。日本に帰って、この考え方が原則的には通用しない場合にぶつかったら、そのときの気持はどうだろう？」

七十万の引揚者のこの社会主義体験が高度成長時代の日本にどのようなように生きのこったかは、あらためてしらべてみないとわからない。しかし、この高杉の記録をはじめとして、理念としてだけ社会主義を見るとい

う方法とは別の方法が、日本の歴史の中に、社会科学として、文学として、また体験のかたりつきとしてあらわれ、一つの道をつくっており、その道は、敗戦後三十年余りたった今も消えてはいない、ということだけは言える。

高杉一郎自身によるこのテーマの追求は、やがて、体験記から文学史にむかい、盲目の詩人エロシエンコの伝記執筆と全集編纂に結実した。

目次

解題 (鶴見俊輔)

動員前後*

アンガラ河

どん底の歌

マルーシャ

緑の隅

極光

学校

春

密林の旅

河岸通り

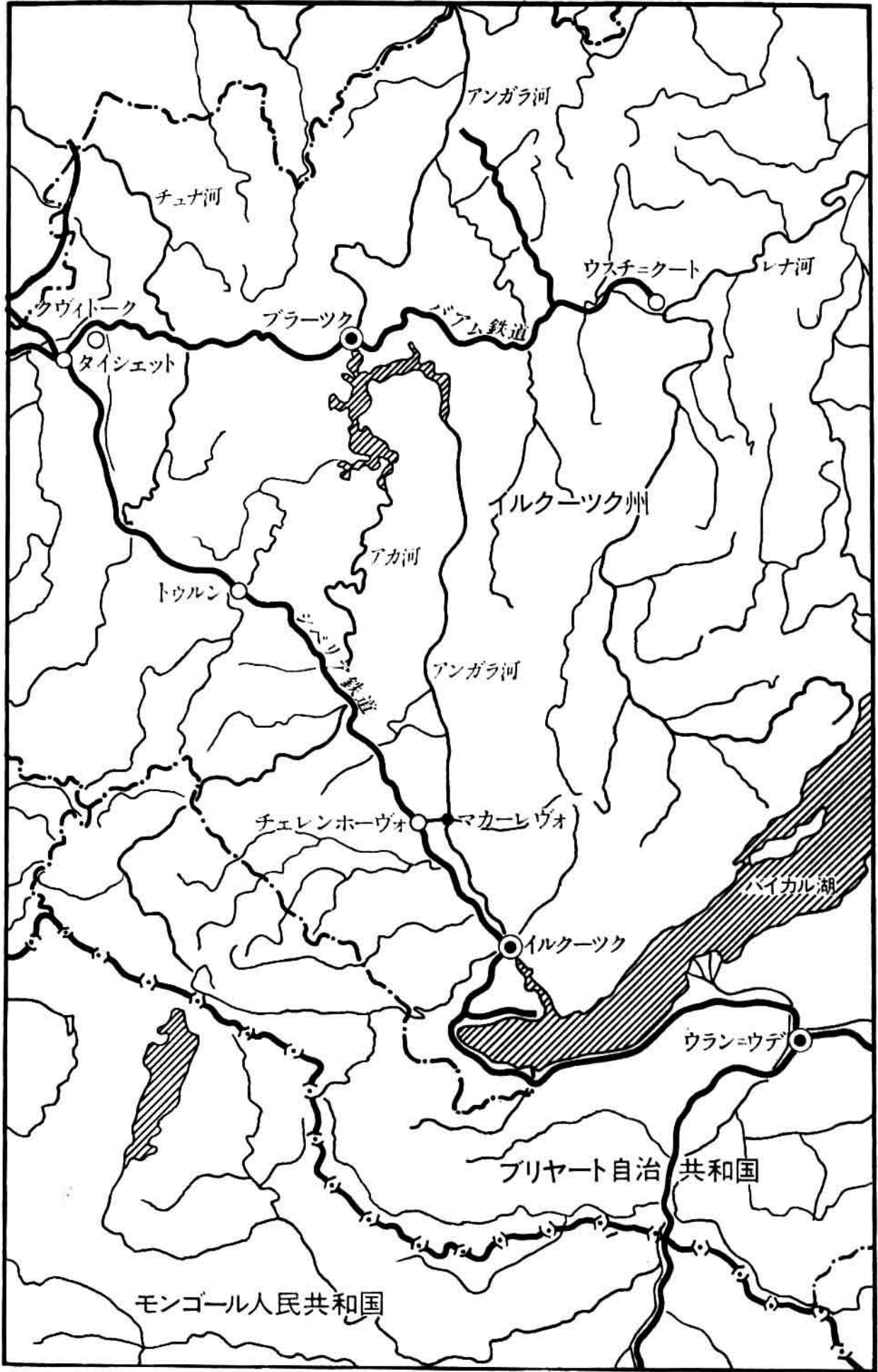
別れ

148 130 100 94 85 67 59 44 21 6 3 i

密林の果てに	159
懲罰大隊	176
晩夏	212
イルクーツク	217
炭鉱町で	257
ソヴェートの人間	267
ホルスト・ヴェッセルの歌	285
帰還	299
夏*	309
軍医少佐ツツケルマン*	313
復員前後*	339
著者あとがき	343

*印は本文庫収録にあたって新たに追加されたもの

新版
極光のかげに



シベリア・イルクーツク州略図

1:8 000 000

動員前後

一九四四年七月十日、東条内閣の情報局は、改造社と中央公論社が戦争遂行に協力的でないという理由で、自発的に解散するように指示してきた。すでにその年の初めから、総合雑誌「改造」と「中央公論」の編集者は、のちに「横浜事件」という名まえで呼ばれるようになったでっちあげにもとづいて検挙されはじめていたが、私は直接には政治にかかわりのない改造社の雑誌「文芸」の編集にたずさわっていたためか、豚箱に閉じこめられる災難からはまぬがれていた。

それからおよそ一週間後に東条内閣は総辞職し、かわって小磯内閣が登場したが、改造社と中央公論社は七月末になって解散し、その社員たちはそれぞれ新しい生活の拠りどころを求めて四散した。まるでそのときを狙いうちしたように、私のところへは召集令状が舞いこんだ。来る八月八日午前八時、中部二部隊（名古屋師団）に集合せよという命令であった。そのとき私は三十六歳であったが、昔いっしょに徴兵検査を受けた、私よりもはるかに頑健な田舎の小学校の級友たちがまだひとりも召集されていないことを考えあわせると、これは「非協力的な」言論機関に対する懲罰召集かもしれないと思った。

中部二部隊では、部隊長が「八」という字は末ひろがりであり、八幡太郎義家にゆかりがある。この日、大